

はばたけ みみょうっこ

春の息吹がみなぎる弥生、進級や卒園、新たな旅立ちや別れが度重なり、これまでの様々な出来事や子どもたち一人ひとりの成長が思い出され、嬉しさや淋しさ、切なさなど様々な感情が複雑に絡み合う時期でもあります。

しろぐみさん(5歳児)の園での生活も残すところ、1ヵ月となりました。今年度、卒園する年長児は2歳児から4歳児までの時期をコロナ禍で過ごしてきました。その間、保育園での生活においても、様々な行事に制限をかけたり、やむなく中止にしたり、給食は決められた場所で食べて黙食をしたり、感染者が複数名出た際には園で集団PCR検査を実施したり、やむなく1週間以上の休園措置をとることもあり感染者があるたびに早く良くなってほしいと願う日々でした。そして、昨年5月、3年間の長きにわたり続いていた緊急事態宣言が解除され、あらゆる制限も緩和されたことで、これまで行おうことができなかつた様々な行事を制限かけることなく実施できるようになりました。これまでも“みみょう”は園内にコロナ感染者がいないことを前提にしてきており、また、子どもたちの“今”は“今”しかないということから、例えコロナ禍であっても、出来る限り子どもたちがたくさんの経験ができるよう、保育に取り組んできたこともあり、日常的な行事についてはこれまでとほとんど変わらず、大きな支障はありませんでした。一方で、ご老人との交流など直接的に命に関わることや、感染を拡げてしまう原因となる食事を伴う行事はこの3年間、敢え無く自粛してきており、改めて、4年前の状況を確認しながらの実施となりました。今年度、3年ぶりに実施した敬老会との交流会やデイケア訪問など、地域のご老人との交流は、子どもたちとの久しぶりの交流にたくさんの方が喜ばれ、涙される方もありました。子どもたちも、おじいちゃん、おばあちゃんとの交流を喜び、「おばあちゃん笑いながら泣いてたね。嬉しかったんかね。もっと喜ばせてあげたい。」といった言葉も聞かれ、コロナ禍では経験できなかつたことが漸くできるようになり、様々な年代の人たちとの関わりを通して、心の育ちがありました。また、コロナ禍で制限してきた食を共にすること(共食)は、コミュニケーション能力を高め、主食・主菜・副菜をバランスよく摂取し、生活リズムを整えることなど子どもの育ちに大きく関係しているということが明らかになっており(参照:「共食」「旬」「簡便性」の観点から見た食生活意識調査 日本女子大学家政学部食物学科教授 飯田文氏/エビデンステーブル(農林水産省 HP))、今年度、ランチルームを活用して大勢で食事が再開できるようになったことや、おじいちゃん、おばあちゃんを招いての食事を共にする機会が再び設けられたことは喜ばしいことでした。また、コロナ禍には保護者も保育者も至る所でマスクの着用をしてきましたが、大人のマスクの着用は、子どもの脳と心の成長を阻むリスクがあるとされてきました。それは、子どもたちは目の前にいる相手の表情や声かけを日常的に経験しながら、言葉や他者との関わり方を身に付けていくからです。(参考:マスク社会が危ない 京都大学大学院教育学研究科教授 明和政子氏)保育現場においてもマスクの着用について苦慮してきましたが、フェイスガードやパーテーションの利用、開放的な空間づくりなど、子どもたちの育ちを保障できるような様々な創意工夫がなされてきました。そういった意味では、コロナ禍における配慮や思いやりを伴った行動を子どもたちは自然と感じ、見てきたのかもしれない。

毎週火曜日の朝、しろぐみの子どもたちとの朝礼を行ってきました。様々なお話をしたり、一緒に考えたり、子どもたちそれぞれの思いを聞いたりする貴重な時間ですが、紙芝居を読んだり、童話を読んだりしたときには、しろぐみさんたちは「読んでくれて、ありがとう」と感謝の気持ちを自然と発しています。また、小さな子たちとの異年齢交流では自然と腰をかがめたり、優しく手を引いてあげるなど、いたわりや思いやりをもった姿があります。

心も体もどんどん大きくなっているしろぐみさんたち、小学校に向けてワクワクしながらも、不安な気持ちもあります。残り少ない園生活ですが、一人ひとりの思いをしっかりと受け止め、子どもたちがもっと、自分らしさを発揮しながら、はばたけるよう関わっていきたいと思います。